

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 21 日現在

機関番号：13401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16771

研究課題名(和文) 極小主義理論に基づいた削除操作の局所性についての研究

研究課題名(英文) On the Locality of Deletion: A Minimalist View

研究代表者

中村 太一 (Nakamura, Taichi)

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門(教員養成)・准教授

研究者番号：00613275

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、生成文法の極小主義プログラムにおけるフェーズ理論の下で、削除操作の局所性を追求した。具体的には、まず削除操作に課せられるとされてきた非局所的な「同一性」条件に焦点を当て、これら条件が統語的「平行性」条件へと還元可能であることを示した。その後、この「平行性」条件がフェーズ毎に行われる A-bar 移動によって形成される連鎖の同一性を用いて定式化可能であることを明らかとした。

研究成果の概要(英文)：This study has investigated whether deletion is licensed locally under the Phase theory developed in Chomsky (2000 et seq.). By focusing on examining so-called Identity conditions on ellipsis, this study has shown that they are reducible to syntactic parallelism. The study has then demonstrated that this syntactic parallelism can be stated in terms of the chains created by A-bar movement, which is applied in a phase-by-phase fashion.

研究分野：英語学

キーワード：省略現象 局所性 平行性 移動

1. 研究開始当初の背景

削除操作には、これまで削除部と先行表現との間での「同一性」に基づく局所的認可条件に加えて、削除文の残余句と先行文の対応要素を含むより大きな単位での「同一性」に基づく非局所的認可条件が必要であるとされてきた (Rooth (1992), Fiengo and May (1994), Fox (2000), Sag (1976), Hartman (2011) 等)。

しかし、近年の言語理論の下では、計算の効率性の観点から、非局所的認可条件は局所的認可条件へと還元・解体されなければならないが、そのような試みがほとんどなされてこなかった。

2. 研究の目的

本研究は、上述の学術的背景の下、近年極小主義理論において展開されているフェーズ理論の下で、(1) 計算の効率性の観点から削除操作に課せられる「同一性」条件を精査し、(2) 非局所的「同一性」条件とその証拠とされてきた言語事実に批判的検討を加え、(3) 局所的条件へ還元・解体することを通して、削除操作の局所性を追求することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、研究代表者が研究の全ての側面を統括し、基本的には単独で研究を遂行する。まず、先行研究における「同一性」条件を、計算の効率性の観点から、フェーズ理論の下で精査し、局所的条件として述べられていない、または述べるのが不可能とされてきたものを洗い出す。その後、非局所的な「同一性」の計算が必要であるのか、統語・意味・音声等多角的観点から批判的に検討する。また、批判的検討により得られた結果を、コーパスやインフォーマントから提供された資料に基づいた実証的研究により裏付ける。この作業を通して、削除操作の局所性についての帰結を探る。また、局所的な条件に還元・解体不可能な「同一性」条件が存在した場合、その理論的意義について考察する。

4. 研究成果

(1) 非局所的「同一性」条件の一部を「平行性」条件に還元可能であることを示した。「平行性」条件は、削除部とその先行詞に加えて、削除文の残余句と先行文の対応要素を含むより大きな単位での「同一性」が必要な非局所的認可条件である。ここで、Griffiths and Liptak (2014: 210) に従い、「平行性」条件を (i) の様に定義する。

- (i) Scope Parallelism in ellipsis
Variables in the antecedent and elided clauses must be bound from parallel positions.

この条件により、(ii) の例文の解釈に関する事実を説明できる。

- (ii) A boy admires every teacher. A girl does, too. (Fox (2000: 4))

(ii) の例において、先行文で a boy の作用域が every teacher よりも広い(>) 読み時、削除文でも a girl の作用域が every teacher よりも広い読みしか許されない。また、先行文で every teacher の作用域が a boy よりも広い(>) 読み時、削除文も every teacher の作用域が a girl よりも広い読みしか許されない。この事実は、作用域が Q(quantifier) R(aising)(数量詞繰り上げ)により演算子・変項関係が形成されることにより決定されるとするならば、(i) の平行性条件により説明できる。

この「平行性」条件であるが、対比(焦点化)される要素も QR により作用域をとると仮定することで (Fox and Lasnik (2003), Messick and Thoms (2016), Thoms (2016))、これまで態の(不)一致に基づく局所的「同一性」条件による説明 (Merchant (2008, 2013)) や対比要素の適格性条件 (違反) (Kertz (2010)) として説明されてきた (iii) の例も、同様に「平行性」条件により扱えられることが明らかとなった。(iii) で対比(焦点化)される要素を小型英大文字で表す。

- (iii) a. THE DRIVER reported the incident, and AN ONLOOKER did too.
b. #The incident was reported by THE DRIVER, and AN ONLOOKER did too.
c. The incident SHOULD have been reported by the driver, but he DIDN'T.
(Kertz (2010: 3))

(iiia, b) の対比は、Merchant のように、削除部とそれに対応する先行詞の間の態の(不)一致に基づき説明することは難しい。なぜならば、(iiic) に示す様に、態の不一致が必ずしも容認度を下げることにはならないからである。一方、Kertz に従えば、(iiia) では、対比要素 the driver と an onlooker は外項として派生に導入され、その後文中で卓立した主語位置へと移動する。このため、対比要素の適格性条件を満たす。一方、(iiib) では、先行文の受動化により the driver が前置詞 by の補部位置へと「格下げ」されており、対比要素の適格性条件に違反する。(iiic) では、項以外の要素が焦点を受けており、適格性条件自体が適用されない。しかし、次例 (iv) は Kertz の分析にとっても問題となる。

- (iv) *THE WINDOW was broken and THE VASE did, too.
cf. ?The snow is GOING to be melted though it DIDN'T.
- (Sugimoto and Nakamura (2015: 137))

(iv)では、先行詞が受動文で削除文が非対格動詞文であるが、この場合対比要素はどちらも内項として派生に導入され文中で卓立した主語位置へと移動する。したがって、対比要素の適格性条件を満たしているはずであるが、実際は容認不可能である。

一方、本研究の分析によれば、(iiia, b)の対比は次の様に説明される。まず、(iiia)では、対比要素はQRを受けることになるが、それぞれの変項は平行的な位置から束縛を受ける。このため、「平行性」条件に違反しない。一方(iiib)では同じ対比要素が異なる位置からQRを受ける。このため、「平行性」条件違反となる。(iiic)については研究成果(2)のところで扱う。)次に、Kertzの分析にとって問題となる(iv)であるが、受動文と非対格動詞文では、後者のみ外項を導入する機能範疇を欠いた節構造を持つと考えることで(Alexiadou, Anagnostopoulou, and Schäfer (2015))、当該機能範疇の有無に基づき「平行性」条件違反による説明が可能であることを示した。これら成果の全てまたは一部を、論文、と発表として発表した。

(2) A移動とA-bar移動では、後者のみが「平行性」条件の計算に関与することを明らかにした。研究成果(1)のところで既に挙げた(iiic)の例を再掲する。

- (iiic) The incident SHOULD have been reported by the driver, but he DIDN'T.

この例においては、項が対比されていないため、先行文のthe incidentも削除文のheもA-bar移動を受けない。しかし、両者はA移動を受け、主語位置に移動する。ここで、仮にA移動も演算子・変項関係を形成し「平行性」条件の計算に関与すると考えると(Hartman (2011))、(iiic)を誤って容認不可能と予測する。したがって、A移動は「平行性」条件の計算に関与しないと結論が得られる。この結論は独立にMessick and Thoms (2016)で得られている結論を裏付けるものである。その一方で、主要部移動が「平行性」条件に関与するののかについては、さらなる検討が必要であることが明らかとなった。この研究成果は、発表として発表した。

(3) 動詞句削除の下での動詞の項交替は複数の「同一性」条件が関わっていることを明らかにした。Merchant (2013)では、項交替

は異なる特徴を持つ動詞的機能範疇主要部vを動詞句VPと併合させた結果起こると仮定し、このvの種類の違いが削除に課せられる「同一性」条件違反を引き起こすとした。しかし、項交替の中には、使役交替のように、「平行性」条件に違反しない場合は、動詞句削除が容認可能となる交替もあれば、心理動詞の項交替のように、「平行性」条件に違反しない場合でも、容認不可となる交替も存在することを、インフォーマントから提供された新たな言語資料に基づき指摘した。さらに、後者の項交替が動詞句削除の下で容認不可となることを、局所的「同一性」条件を用いて説明可能であることを示した。この成果は、論文として発表した。

(4) 「平行性」条件を、フェーズ理論の下で、A-bar移動の連鎖の同一性として捉えられることが明らかとなった。Chomsky (1995, 2000)等に基づく、ある要素Aの連鎖は、移動した要素が生起した位置(Aの姉妹要素)の記録と考えることができる。したがって、連鎖の同一性は移動した要素が生起した位置が同一であることを意味する。このことから、(i)の「平行性」条件は、A-bar移動の連鎖の同一性として捉えることが可能である。また、A-bar移動は、フェーズ理論の下で局所的に行われるものであり、この意味で局所的な言語計算の結果得られる情報に基づき、「平行性」条件を捉えることが可能となる。今後の課題は、ここでの研究成果が持つ理論的・経験的帰結についてさらに追求することである。

参考文献

- Alexiadou, Artemis, Elena Anagnostopoulou, and Florian Schäfer (2015) *External Arguments in Transitivity Alternations: A Layering Approach*, Oxford University Press, Oxford.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step*, ed. by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Fiengo, Robert and Robert May (1994) *Indices and Identity*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Fox, Danny (2000) *Economy and Semantic Interpretation*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Griffiths, James and Anikó Lipták (2014) "Contrast and Island Sensitivity in Clausal Ellipsis," *Syntax* 17, 189-234.
- Hartman, Jeremy (2011) "The Semantic Uniformity of Traces: Evidence from Ellipsis Parallelism," *Linguistic Inquiry* 42, 367-388.

- Kertz, Laura (2010) *Ellipsis Reconsidered*,
Doctoral dissertation, University of
California, San Diego.
- Merchant, Jason (2008) "An Asymmetry in
Voice Mismatches in VP-Ellipsis and
Pseudogapping," *Linguistic Inquiry* 39,
169-179.
- Merchant, Jason (2013) "Voice and
Ellipsis," *Linguistic Inquiry* 44, 77-
108.
- Messick, Troy and Gary Thoms (2016)
"Ellipsis, Economy, and the
(Non)uniformity of Traces," *Linguistic
Inquiry* 47, 306-332.
- Rooth, Mats (1992) "Ellipsis Redundancy
and Reduction Redundancy," *Proceedings
of the Stuttgart Workshop*, ed by Steve
Berman and Arid Hestvik, University of
Stuttgart, Stuttgart.
- Sugimoto, Kenji and Taichi Nakamura (2015)
"An Argument Structure Alternation of
Psych Verbs under VP-Deletion," *JELS*
32, 132.
- Thoms, Gary (2016) "Pseudogapping,
Parallelism, and the Scope of Focus,"
Syntax 19, 286-307.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文](計 3 件)

Taichi, Nakamura (2018) "Review:
External Arguments in Transitivity
Alternations: A Layering Approach,"
Studies in English Literature 59, 107-116.
(査読有り)

Taichi, Nakamura (2017) "Review:
Pseudogapping and Ellipsis" *English
Linguistics* 33, 556-566. (査読有り)

Taichi Nakamura, Kenji Sugimoto (2015)
"Argument Structure Alternations and
Verb Phrase Ellipsis: Two Case Studies,"
Explorations in English Linguistics 29,
63-83. (査読有り)

[学会発表](計 1 件)

中村太一、削除に課せられる平行性条件と
A/A-bar 移動、日本英語学会第 35 回大会ワー
クショップ、2017 年 11 月 18 日東北大学川内
キャンパス

6. 研究組織

(1)研究代表者

中村 太一 (NAKAMURA, Taichi)

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部
門(教員養成)・准教授

研究者番号: 00613275

(2)研究協力者

梶本 顕士 (SUGIMOTO, Kenji)